
俺たちのクリスマスは戦場でした

うい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺たちのクリスマスは戦場でした

【Nコード】

N7162Y

【作者名】

うい

【あらすじ】

生まれた時から不幸のどん底とは言えない程度の不幸な人生を送ってきた桜庭琢磨。

彼は、そんな不幸な人生を変えようと、とあるゲームに参加する。――サンタ狩り――。サンタの持つ幸せの袋を手に入れることが目的の単純なゲームだった。彼氏彼女もない寂しい奴らが集まるこのゲームに参加したのだが、ゲームが始まる数日前に、学校一の美少女に告白されてしまう。

「たっくん、付き合ってください！」

幸せになる前から幸せの絶頂を味わってしまい、戸惑う琢磨だが、彼女もゲームに参加すると言い出した。今更参加を取り消すのも気まずくなり、所詮ゲームだからとタ力をくくっていたのが間違이었다……

戦場に幸せは転がっていない(前書き)

2chのサンタ狩りというスレを、自分なりにアレンジしてみました
もちろんサンタは元ネタ通りにチート性能です

戦場に幸せは転がっていない

ごく平凡、と言えば語弊がある俺、さくらはたくま桜庭琢磨。

今まで、プチ不幸とも言える人生を送ってきた。

財布を落とせば中身を抜き取られて警察に届けられる。

好きな女の子の前で派手に転ぶ。

音楽の授業で、歌のテストで声が出ないなどなど。

不幸のどん底とも言えないのが憎らしい。そんな小さな不幸ばかり起こる人生だった。

そんな俺がいる此処こそ、

「早く撃て！！ 逃すな！！」

戦場だった。

もちろん、サバゲー（サバイバルゲームの略称）なんてチャチなもんじゃあ断じて無い。

本当に人が死ぬし、ものホンの銃弾だって頭上を通り過ぎる。

アサルトライフルのAK-47を構える手が汗でびっしょりと濡れていた。ヌルヌルとした感触が気持ち悪い。

「おい、新人！ ボサツとしてんじゃねえ！！ “幸せ”は分けてやらねえからな！！」

「は、はいっ！」

恐怖で肩を震わせ、グリップを力いっぱい握る。

先端近くに取り付けられた突起（なんて呼ぶのか分からないけど、ゲームとかで主観視点にした時、敵を撃つ目安になる部分）を敵に合わせる。

俺たちが何と戦っているのかって？

「たつくん」

隣でAK-47のマガジンを取り替えている同い年の女の子が、琢磨、つまり俺のあだ名を呼んだ。と言っても、呼んでいるのはこの女の子ぐらいなものだ。

その女の子は、油断すればこんな血が踊り肉が弾ける戦場でも抱きしめたくなるほどの笑顔を浮かべ、こんな人の血が舞い弾丸が刺してくるような危険地帯にしながら呑気な声をあげる。

「頑張つて、“幸せ”を手に入れようね」

ぼお、と顔が火照ってしまった。

いけないいけない。見とれている場合じゃない。とにかく撃たないと。

そういえば、誰と戦っているのか、だったつけ？ それは、背中に大きな袋を背負つて、赤い服と帽子を着た――

「くそっ！！ トナカイが邪魔で当たらねえ！！」

白い髭を生やした、と言つても目の前にいるほとんどがそんなの生やしてないけどね。

「くそ、当たらない……ッ！！」

誰でも知っているのに、誰にも信じられていない存在。

「君たちみたい な者達に、“幸せ”は勿体無い」

―――サ
ンタだ
った。

戦場に幸せは転がっていない(後書き)

クリスマスにはまだ早い？

知らん！！

リア充爆発しろ！！

学校に昔夢見た青春はない

ことの発端は数日前の出来事だった。

クリスマスも間近に迎えた十二月某日。

「はぁ……」

授業の合間の休み時間。桜庭琢磨はヘッドホンで音楽を聞き、机に伏せていた。

聞いているのは、最近ハマった歌手の『Dear・X・mas』と呼ばれる三人グループの曲だった。単調なリズムが心を落ち着かせてくれて、一人でいても寂しさを感じさせない。

まるで自分のためにあるような曲だった。

桜庭琢磨は休み時間も一人だ。だが、決して友達がいらないわけではない。表面的な付き合いの友達ならクラスの男子全員が当てはまるほどだ。

なら、なぜこんな状況なのかと言えば答えは二つ。

一つは、固定のグループに属していないからだ。八方美人の人付き合いをしていたら、いつの間にか“ぼっち予備軍”になっていた。

二つは、自ら話しかけない人間だからだ。自分から話しかけることで相手が嫌な思いをするんじゃないか、と内心で恐がってしまっている。だから、相手から話しかけられることで、たとえ嫌われても相手が悪いんだと責任転嫁できる。

人と関わるのが怖い人間だった。

もともと備わっている不幸と相まって、相乗効果でも生み出しているのかと思うほど話す相手がいない。

「んー」

曲が変わる境目でチャイムが鳴った。ヘッドホンをカバンに放り投げ、曲をとめる。

これが、桜庭琢磨という男の高校生活である。

放課後になると、やはりというか当然と言うか一人ぼっちだ。

帰宅部員なので帰る時間は早い。どこかしらの部活に入ろうかと思うが、こんな時期に入って居心地の良い部活が思いつかない。

なので、今日も駅までの道をとぼとぼ歩いていると、とある女の子の後ろ姿が見えた。

「きたがわ とつこ北川冬子……か？」

髪は肩で切りそろえられ、スラリとした体付きが後ろから見ても分かる。そしてその正体は、学校一とも言われるほどの美少女だった。

その冬子は一瞬、こちらを振り返った。すぐに顔を前に戻したが、視線が合った。

ドキツとする。

ここだけの話だが、冬子と琢磨は幼い時、隣人で、同じ日に生まれたらしい。小学三年生まで一緒に遊んでいたのはおぼろげだが覚えていいる。しかし、男女間の変な対抗意識に巻き込まれ、そのまま離れて、遊ばなくなり、次第に忘れてしまっていた。

この学校に来るまでは、だ。

すごい美少女がいるぞ、と友達に誘われ着いて行けば、どこかで見知った顔だった。それが冬子と気づくのは更に数日後になるわけだが。

「あいつの記憶から、俺は消えちまってんだろっな」

そう口に出すと、虚しさが心を撫でた。ちよつと寂しい。
声をかけるなんて大それたことはせず、そのまま自宅へと直行した。

……。

家に帰れば、やることも無いのでネットサーフィンが始まる。テレビやネットで話題のワードを打ち込む。

今検索しているのは、クリスマスだ。気が早いと思うが、周りはずでにクリスマスの話題一色。他に調べることもないので、検索を開始した。

「クリスマス、プレゼント、彼女、彼氏……」

検索結果で出てきたワードを読み上げる。どれもこれも華々しいワードばかりだ。

……だんだん腹が立ってきた。
なにが彼女だ彼氏だ。クリスマスごときで浮かれやがって。

「なんだこのリア充履歴は、死ねばいいのに!!」

ぶつけどころのない怒りを声に任せて叫んだ。叫んだと同時に悲しくなった。

肩を落とし、違うワードで検索しようとする、画面の端に手紙のアイコンが付いた。メールを着信したマークだろう。

そこにカーソルを動かし、中を開く。差出人はオンラインゲーム

で知り合った友人だった。

そのオンラインゲームとは、敵味方に分かれて撃ち合う、疑似戦争を体感できるというもの。ネットで大人気のオンラインゲームの一つだ。

文面をまじまじと見つめる。

差出人「ケーブル」

よう、マーク

最近調子がいいな！

同じチームメイトとして鼻が高いよ

まあ、前置きはこれぐらいにして、ちょっと話があるんだ

近々、オフ会を開こうと思っているんだが、そのついでに面白いイベントも見つけたんだ

その名もサンタ狩り

サンタを狩ると幸せが手に入るとかいうふざけたゲームなんだけど、リアルなサバゲーみたいなものらしいんだ

クリスマスイブの前日から三日間なんだけど、暇？

どうだ？ 参加してくれないか？

嬉しい相談だった。

今の生活は、まるで全力で振り続けた炭酸飲料のように刺激が無い。さすがに舌が痛くなるほどの刺激はお断りしたいが。

なら、だ。オフ会に参加して有意義なクリスマスを過ごしてやるう。

毎年のように一人寂しく眠る生活はこりこりだ。

バイトで稼いだ金もたんまりと残っているし、三日間ぐらいの寝泊まりはできる。

それに、幸せという言葉にも惹かれた。プチ不幸な自分の慰めぐらいにはなるだろう。

もしかしたら、本当に幸せになるかも。などと淡い期待をしている。

そうと決まれば行動だ。すぐさま返事を書く。

誘いありがとうなケーブル

もち参加するぜ！

会えるのが楽しみだよ

なんか、英文を訳したみたいなお文章になってしまったなあ。

違和感は大して感じないのでそのまま送信した。

返信はすぐに来た。

マジかよ！

そりゃ良かった

他のメンバーも来るらしいから、こりやお祭りかもな

集合場所なんかは次のメールに載せとくわ

「っしあ！ オフ会ー！」

小躍りしながら部屋を回ってしまっほど嬉しかった。

ネット充（ネットで充実している人）ゆえの性が、こういう話は何で舞い込んでこない。

友達の少ない琢磨にとって、生きてきた中で五本の指に入るほどのビッグイベントだ。

次に連続してメールが届いた。ケーブルの書いていた文章通り、中身は集合場所の地図が貼ってあった。その内容を携帯に送り、保存する。

普通なら、ここで悪い人に誘拐されるなどのリスクも考えるべきなのだが、浮かれたままヘラヘラと笑う琢磨は愉快に小躍りするだけだった。

「オッフ会、オッフ会、うれしいなー」

ついには歌いだしてしまった。

これだけ上がった琢磨のテンションを下げるイベントは、その次の日に起きる。

……。

いつものように、いつもと変わらず、至って普通に登校している桜庭琢磨。

だが、今日の彼は違った。

「ふっふふーん」

軽くスキップをしながら満面の笑顔だったのだ。
校門の前に立つ先生が挨拶してきた。

「おはよ」

「おっはよーございまーすっ！」

先生の声を遮り、大声で叫んだ。他に登校している生徒の視線が

突き刺さるが、まるで何も感じていない琢磨は、そのまま教室へとスキップしながら歩いていくのだった。

「はあ……」

そんな一大イベントがあつたとしても、学校での琢磨は相変わらずの一人ぼっちだった。

ヘッドホンを両耳にあて、うつぶせ寝をしていた。
ふいに、肩を叩かれた。

「んあ？」

「お呼びだぞ」

肩を叩いたのは友達たなへよしやの田辺ヨシヤだった。その顔は引きつっており、なんだか気まずささえ感じられる。

何事かと思い、教室の出入り口をチラッと見る。

「……えっ？」

北川冬子だった。

視線が合うと、冬子は朗らかな笑顔をこちらに向けてきた。心臓がハイスピードでビートを奏で始める。

ヨシヤが耳に口を近づけてきて、小声で話してきた。

「なあ、お前。冬子さんに何かしたのか？」

「するわけないだろ」

「それもそうか」

そう言うと、ヨシヤは琢磨から離れ、いつものグループに混ざっ

て談笑を始めた。

多少恨めしく思いながらも、頭を切り替えて冬子へと歩み寄る。正面に立つと、余計に可愛く見えた。鼻や目、顔立ちが全て完璧だし、非のつけどころが無い。

開口一番は琢磨が取る。

「なにか、用ですか？」

「久しぶりだね、たつくん」

教室中の視線が自分たちに集まった。

……コイツら、聞いてないフリしてコッソリ聞き耳たててやがったな。

ちなみに、たつくんというのは小学生の時の琢磨のあだ名だ。妙な懐かしさがこそばゆい。

しかし、教室中から集まる視線がさすがに辛くなり、冬子の手を引っ張って廊下に行く。

そのまま誰もいない場所まで連れて行く。

「……で、久しぶり、って？」

「うん、小学校以来だったからね」

えへへ、と笑う顔にいちいちドキドキしてしまう。

いくら幼い時の友達とはいえ、こんな美少女と親しく話してしまつていいのか、と疑問に思う。カッコイイわけでも、コミュニケーションを取る力があるわけでもない自分が。

「だからね、たつくんに言いたいことがあるんだ」

「脈絡が分からないけど……」

だから、という言葉の間違って使った冬子にツッコまざるおえな

かった。

その返事がおかしかったのか、口に手を軽くあてて、おしとやかに笑う。

「そうだね。じゃあ、直球で言うね」
「う、うん」

冬子の声のトーンが落ちたことで、体が強張ってしまった。唾を飲み込むものにも心なしか精一杯の力が必要だった。

上目遣いでこちらをじっと見据えてきた。
その潤んだ唇が、そつと動く。

「たつくん、付き合ってください！」

時が止まった。

多分、こんな感覚のまま時間が進んでいるんだとしたら、今頃よだれを垂らして、ボーっとしたバカみたいな顔の奴が冬子の前に立っていると思う。

幸いにも自分の体内時計がスローモーションで時を刻んでくれたおかげで、よだれを垂らすバカは現れなかった。

それにしても、今冬子はなんて言った？

「付き合ってください」

もう一度聞こえた。

付き合ってください？ 突き合ってください？

ああ、剣道のことが、と思考が停止したとは思えない結論に至ってしまった。

「悪いけど、俺剣道の経験無いんだよね」
「へ？」

今度は冬子の時が止まった。
あれ、おかしかった？

「突き合ってください、って剣道のことじゃないの？」
「ええっ、どうしてそうなるの!？」

「いや、突き合って、って」

「ああ。もう、違うよ、たっくん。付き合って、っていうのは、
交際してほしいってことだよ」

頬を膨らませて怒る冬子可愛いなくへへ。

おっと危ない危ない。もう少しで完全に頭が飛ぶかと思った。

「交際、俺と冬子が……、交際つつっ!？」
「はい！」

冬子の喜嬉とした声と同時に、どこにそんなに隠れていたのか分から
ないほどの数の男子生徒が、そこら中から飛び出し、襲いかか
ってきた。

「「「「桜庭琢磨の裏切り者おおお!!!」」」」

「う、うわあああああああああああ!!!」

視界が真っ暗になる頃には、すでに俺の意識は無くなっていたの
だった。

非リア充の俺にメールテクはない（前書き）

タイトルとタグでネタバレしました
とりあえず、見ている人がいるなら、他の複数人の話を書こうかな
と思っています

非リア充の俺にメールテクはない

目を開けて見えた物は、一面の白い壁に、黒い穴が平均的な距離を保って空けられていた。

背中を伝うふかふかとした感触から察するに、俺は今布団かベッドに寝かされており、見えているのは天井で、つまり今の今まで気絶していたことになるわけだ。

なにが言いたいか、ズバリ言うつと。

「……、どっ?」

ボソツと呟く。

右横でバタバタと足音が聞こえ、視界に天井とは違う物が移った。北川冬子の心配した顔だった。

その顔は、さながら飼い犬が風邪をひいて、処置も対応も分からず慌てているみたいだった。真冬だというのに、その顔には一筋の汗が見える。

「大丈夫だった?」

冬子が口を開いた。

大丈夫だった?　と言われれば、どこも痛まない体を診て言おう。

「大丈夫……」

思ったよりも声がざらついていた。無理やり作った笑顔も不自然な出来だ。

そんな様子が無理をしているように見えたのか、冬子は腕や肩を掴んで揺さぶってきた。

「ねえ、ほんと？ 無理してない？」

「大丈夫……だって」

起きたばかりで本調子じゃないだけだ。

そんな言葉をカッコ良く言ってると思った矢先、冬子は安心してきった顔で「ほっ」と声を出した。

「良かったぁ……」

あんなことになった原因はお前にあるだろ、と一言文句を付けたくなったが、ここまで心配してくれた女の子に真顔で言えるほど根性は腐っていない。

むくつと上半身を起こ上がらせて、足をベッドから下ろし、冬子と向かい合う形になる。

どうして冬子は、俺なんかを好きになったんだろう？

罰ゲームか、興味本位か、次の彼氏までのツナギか、本当に好きなのか。

「怪我が無くて良かった、たっくん」

なぜ小学生で終わった関係が、ここで結びつく？

疑問しか浮かばない。浮かべない。ポジティブに考えるほどワケが分からなくなる。

あの笑顔が、無垢な笑顔が嘘のように思えてきた。

「なあ」

「ん？」

無意識に声が出た。

「なんで俺なんか告白したんだ？」

言った。

まだ付き合っているわけでもない。これじゃあ断る風に聞こえてしまう。

そんな嫌みな質問に、冬子は朗らかな笑顔を浮かべた。

「好きだからだよ」

それだけか？

疑心暗鬼というのは、こういう感じなのだろう。

本当に、本当に、何度も言うが本当に、俺は運動も勉強もお金も顔も良くない人間だ。もしかしたら、性格もヒドいかも知れない。いや、告白してくれた女の子にあんなヒドいことを言える時点で、優しい性格とは言えないだろう。

目の前の、まるで女神のように無垢で、天使のような女の子は、薄汚い心の俺にソツと手を差し伸べた。

「行こつ。午後の授業、始まるよ？」

疑うのがバカバカしくなった。

そうだ。こんな俺にもモテ期が来たんだと思えばいい。一生分の、いや来世もまとめたようなモテ期が。

来世の俺には悪いが、今世は俺の一人勝ちだ。こんな美少女と付き合えるんだぜ？ 勝ち組さ。

勝ち組の階段をジェット機で上がっていくような浮かれたテンションのまま、部屋を出る。

「そうだ」

まだ言っ てなかったことがあった。

「ん？ なに？」

「さっきの返事、オーケーな」

素っ気なく、別に興味ないような言い方で言っ てみた。

そんな返事に、冬子はクスツと笑い、

「ありがとう」

ホモでも女好きに変えてしまっ うんじゃないか、と思えるほどの絶世の笑顔をくれた。

もちろん、午後の授業はちょっとした地獄だった。

クラスメートのほぼ全員がこちらをチラチラと見てはコソコソと話している。

なんなんだ。そんなに俺が学校一の美少女と付き合っ うのが不満か。ふん、確かに俺は取り柄も無い奴だが、人にはモテ期という物があるってだな……。

と、無性に教壇に立ち、クラスメートの前で説教したくなった。でも、そんな度胸はどこにもないし、余計にこじれるだけだから放っ ておく。そうしておけば悪化はしないのだ。

ホームルームが終わったあと、俺が北川冬子をレイプし、性奴隷にし、無理やり告白させているという実もふたも無い噂がクラス中に広がった。

……どうしてこうなった。

……。

「どうしたもんかねえ……」

無論、冬子の話でもあるが、彼女が出来たという幸せを噛みしめている最中の俺に、幸せを掴もうぜ！ などという非現実的な話を持ち込んできたケーブルに、なんて言おうか迷っているところだ。断るのも気まずい。同じメンバーだし、一番中の良い相手だからだ。

なら行くか？ いやいや、彼女を置いて、クリスマスにゲームのオフ会をしている彼氏がどこにいるだろうか。

ならどうする？

「とりあえずまあ、冬子に聞いてみるかな」

休み時間の間に交換していた、携帯の中のメアドと電話番号を探す。

北川冬子。あった。ここは、迷惑じゃないようにメールをする。

こんばんは

さっそくメールしてみたよ

いきなりでごめんだけど、クリスマスとかってどうするの？

こんなもんだろ、と送信ボタンを押す。送ってから色々考えてし

まった。これ素っ気ないんじゃない？とか、顔文字入れた方が良かったかな？とか。

そんな不安をよそに、二、三分経ってからメールが返ってきた。

ありがとうー

クリスマス？ もちろん、たつくんと一緒にいるよ（笑）

やっぱりそう来るか。

俺だって同じ気持ちだが、先客をむざむざ切り捨てるのも気分が悪い。

まずは頼んでみるか。

実はクリスマスに、ゲームのオフ会に誘われてるんだけど一緒に行く？

送信。

……っておい！

「オフ会ってなんだよ！ そんな言葉、アイツが知ってるって限らないじゃねえか！」

ケーブルとメールしている時の感覚で返してしまった。
そもそも、なんで彼女連れてオフ会だよ！

「ああ、なんて言おう……」

背筋に氷水でも垂らされたような悪寒が駆け抜ける。冷や汗が止まらない。

慌てるな慌てるな。ここで慌てちゃいけない。ドイツ軍人はうろたえない。

メールの着信音が鳴った。驚き、肩が跳ねる。
メールを恐る恐る開いた。

オフ会って、『コーリング アウト アザー』？
たっくんの大好きなゲームだね
いいよ！一緒にここ

え、なんで知ってんだよ。

ちよつと呆然としていると、また着信音が響いた。

驚かせちゃったかな

寝言で言ってたからそうなのかな、と思って（汗
気にしないで！

寝ている時までゲームのこと考えてるって、もはや俺は病気なんじゃないか？

っていうか、寝言で『コーリング アウト アザー』って言えた自分に何より驚いた。

もやもやが拭い去れたわけじゃないが、冬子は信用することにする。着いてきてくれるならそれでいいじゃないか。

日時と集合時間を添え、『そうなの？ んじゃ、楽しみにしてるね』とだけ送った。

『うん！ おやすみ』という短文が送られてきたのを見届け、携帯を閉じた。

ケーブルには、なんて言おうか。友達と言っておこう。今はそれぐらいしか思いつかない。

両方を取るって、けっこう残酷な選択してしまったかな。

こうして、まるでリーマンが電車の乗り換えをするかのように、俺の運命もまた、違うルートに乗りかかったのだった。

神様がいるんなら心から感謝するね。まあ、幸せを与える人選を完全に間違えたわけだが。

非リア充の俺にメールテクはない（後書き）

メール文の書き方ってこんなでいいのかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7162y/>

俺たちのクリスマスは戦場でした

2011年11月24日12時49分発行